2017年12月7日(木)　朝日新聞 [岡山]

避難指示 絵文字デザイン

災害時に、遠くからでもはっきり避難指示ができる「ピクトグラム（絵文字）」を、岡山市消防局と川崎医療福祉大の学生らが開発した。作品は総務省消防庁の表彰を受け、12日には、東京で開かれる全国シンポジウムで発表する。

災害避難用ピクトグラムを開発した皆さん。右から青木陸祐教授、水島理絵さん、岡谷さやかさん、難波咲希さん、渡辺敏規さん、岩藤百香講師、川之上佳里さん、浜田萌さん＝倉敷市松島

市消防局×大学生 作品が全国表彰

絵柄増やし用途拡大狙う

ピクトグラムとは、非常口やトイレなどを一目で分かるように示す簡潔な絵のこと。1964年の東京五輪を機に日本で考案され、世界に広まった。

岡山市消防局北消防署の消防士長で特別高度救助隊員の渡辺敏規さん(35)は、火事現場で聴覚障害の人に避難指示が伝わりにくかったことが心に引っかかっていた。放射性物質や化学毒などによるテロや災害時の救助活動では、全身を覆う分厚い防護服を着る。声は伝わらない。日本語が分からない人もいるだろう。

「誰でも一目で指示が分かるピクトグラムは作れないだろうか」

昨夏、母校の川崎医療福祉大にある医療福祉デザイン学科に赴き、相談した。渡辺さんの話を聞いた青木陸祐教授と岩藤百香講師は「これこそデザインの力が生きる課題だ」。ピクトグラムが得意な学生5人を選抜し、開発プロジェクトを発足させた。

最初に作ったピクトグラムはA3サイズで、赤で描いた。教室内ではよく目立った。だが、訓練現場に持っていくと、小さすぎた。赤色の絵も、黄色い防護服を着た救助隊員が持つと全然目立たなかった。

現場を知った学生たちは、デザインを何度も練り直した。たどり着いた最終案はA2サイズで青色。黄色との対比でよく目立ち、色の見分けが難しい人にも分かる。最終案の図を描いた難波咲希さん(22)は「細かい部分を省き、できる限りシンプルにするよう心がけました」と話す。

渡辺さんが改めて訓練現場で使ってみると、遠くからでもよく見え、他の消防署員らから好評だった。消防署に見学に来た子どもや留学生も「分かりやすい」と意見を寄せた。

渡辺さんは「次は実際の災害現場で使ってみる」と話す。今後、夜間でも使える工夫や、現在3種類しかない絵柄を増やしていきたいと意気込んでいる。

（中村通子）

災害避難用ピクトグラムを消防訓練で使っている様子＝川崎医療福祉大提供